

居場所を求めて

五島真澄

Young Farmers Forum (以下YFF) に参加することになった経緯から書く。

6月頃、SNSで流れてくる情報の中に東京芸術祭ファームのプログラム参加者募集をいくつか見つけた。過去数年の間にもうっすら「APAF」というワードをどこかで見た記憶もあった。でも自分は福岡在住だし、無縁だと思い当初はスルーしていた。気持ちが揺らぎ始めたのは、同じ時期に複数の知り合いから「参加してみれば？」と連絡が来た時だった。

ホームページを開き、どんなプログラムがあるか片っ端から調べてみた。YouTubeのオンライン説明会も見た。アートトランスレーターアシスタントも含め、正直全部参加できるのであればしたいと思うラインナップだった。その中でFarm-Lab Exhibition (以下Exhibition) に応募。国際共同のクリエイション現場に直接関わる立場にいたい、という思いから選択した。応募フォームにはYFFとの併願も可能と記されており、ぎりぎり20代だし、せっかくならば、と希望した(このレポートが出ている頃には30になる。ギリギリセーフである)。

結果的にExhibitionの選考は漏れてしまうわけだが、落胆していたらその10日後にYFFに参加できる旨の連絡が入った。ついでに応募する、という半ば消極的な動機ではあったが、歓喜したことは今でも覚えている。昨年、一昨年も東京以外を拠点とする参加者が数名見受けられ、今回九州から参加できたことはありがたい経験だった。

・ガイドラインとコミュニケーションデザイン

参加するにあたり、新鮮に感じたのはファーム期間初期に実施されたオンラインでのガイドラインの共有とコミュニケーションデザインのレクチャーの時間だった。

ガイドラインの内容は、差別やハラスメントの禁止。また具体的にどういったことがハラスメントに値するのか。参加者が互いに尊重しあうために心がけることの提示や、プログラムをより良くするための心構えが記されていた。予めこのガイドラインは送付されてきたが、後に改めてZoomを使用し参加者全員で一つ一つの項目を読み上げて確認していく時間が設けられた。

ともすれば「そんなこと当たり前でしょ」と言われてしまいがちな、基本的なことがガイドラインには書かれていた。しかし差別やハラスメントは無自覚に発生することが多々ある。プログラム参加者全員の「共通認識」として、これを冒頭で時間をとりシェアするのは画期的だった。海外でどうかは分からないが、日本ではもっとこの風潮が広がって欲しい。日本に根強く残る暗黙の了解の文化は限界が来ているし、気にはするけど、その気にする度合いというのはどうしても個人差がある。

特に国を超えたクリエイションや対話の場では思いがけないところで摩擦が生まれてしまう可能性を孕んでいるから、このガイドラインの共有はきっと多くの参加者に安心感を与えてくれたように思う。

コミュニケーションデザインのレクチャーはこれをさらに噛み砕き、国際的な現場で注意すべきことや権力構造、ジェンダーについて、コミュニケーションデザインチームが丁寧に説明してくれた。「デザイン」というのが肝で、ただ伝えて強要するのではなく、変わり続ける世界の中で対話において何に注意すべきか。今後も更新されることを前提としてお互いに学び続ける姿勢や、何か問題が起きてきちっと順応できる様な環境を形作ろうとしていると感じた。

YFFの活動は大きく分けて3つあった。

- Asian Performing Arts Camp（以下Camp）とExhibitionの見学。
- 東京芸術祭のプログラム鑑賞
- 活動日毎のレポート提出

Exhibitionと芸術祭のプログラム鑑賞は福岡在住ということもあり、残念ながらほとんど見ることが叶わなかった。Campは幸い、基本的にオンラインでの実施のため沢山見学ができた。今回はそれについて主に書こうと思う。

・Camp

まずそもそもこのキャンプで一体何をやるのか。募集期間中のオンライン説明会を見てもよく理解できずにいた。ホームページに添付された、Zoomの分割された画面の中で多国籍の人たちが笑顔で写っている過去の写真を見ても、「とりあえずアジアの色々な国の人たちが一堂に会するのだな」ということしか分からなかった。

Campを初めて見学した時、曇っていた視界が一気にクリアになった。キャンプ参加者それぞれが持つアイデアや問題意識、そして取り組もうとしている活動のプレゼンテーションを目の当たりにし、多種多様な背景や状況をリアルに知ることができた（この時間を期間中はWander Trekkingと呼んでいた）。毎回チェックインとチェックアウトという、その時の気分や直近で起きたこと、その回がどうだったかをシェアする時間がとても心地よかった。

Campの活動を見学する中で、共通して感じたことがある。それはメンバーそれぞれが異なる出自ながらも、自分の居場所や存在意義を問いかけていることだった。

中でも興味を惹かれたのが参加者の一人であるAlbert Garciaの活動だった。マカオでフィリピン系の家庭に育った彼は二つの国のルーツを持ち、自分のアイデンティティ、社会の中でどう存在するか？を問い続けていた。

個人的な話をすると、僕は日系三世のアメリカ人の母と日本人の父の間に生まれ、福岡で育ってきた。生まれた時から母とは英語、父とは日本語で会話をし、義務教育を受ける様になると外では日本語、家では主に英語というハイブリッドな言語感覚の生活を送った。家庭の中では英語で問いかけると日本語で答えが返ってきたり、英語で分からない単語があれば日本語を混ぜる、ちゃんぽんイングリッシュがよく起きる。近くで見ていた同級生はよく目を点にしていた。アメリカと日本の二つの文化圏が混ざり合った生活は、英語が喋れるというアドバンテージはあれど、学校の中のコミュニティや社会の中で馴染めないと感じたことは少なくないし、自分の居場所はどこにあるのだろうかと何度も疑問に思った。仕事の都合で月の半分はごっそり家にいなかった父から日本の社

会について学べることは少なく、学校という社会の縮図の中で、どう立ち振る舞うかを自分なりに試行錯誤して学んだ。

インターナショナルスクールに通っていたわけでもないのに、普通に生活していると二つの国のルーツを持つといった、同じ様な境遇の人と出会うことはほとんどない。いたとしても、例えば10代の多感な時期に互いに自分の生活やルーツのことを話すかといえば、あまり話さないと思う。

我が家の国際協働がうまくいっているかはさておき、そんなこともあり改めて自分のルーツを辿りたい気持ちも少なからずあったYFFへの参加。その中でAlbertの話は自分と大いに重ねてしまう部分があり（もちろん国も文化も異なるため抱えているものは違うけれど）、多大なシンパシーを覚えた。

見学をしていたある会で、彼がふとキャンプメンバーに「僕はナルシストだと思う？」と質問をした時はぎゅっと胸が締め付けられた。自分のルーツや居場所を探すといった行動は、自ずとひたすら自分を見つめる行為に繋がる。自分が何者なのかを見出そうとする姿は第三者からしたらペルソナを被っている様に見えかねない。自分を俯瞰した時に生じる、社会にどう捉えられるかという不安な気持ちが痛いほど理解できた。

10月30日に実施されたCamp最終公開プレゼンテーションでは、総勢8名いるメンバーが互いにコラボレーションし合い、キャンプの周りに形成される集まりのイメージに重ね合わせ、3つのBonfire（焚き火）という形で発表された。

Zoomやオンラインのアプリ機能をふんだんに応用したプレゼンテーションは、これまでに観たどんなオンライン作品よりも群を抜いて面白かった。8名のアーティストのリサーチがリンクする部分が繋がり、他者を介することでより鮮明に浮かび上がる価値観と多様性がそこにあった。発表には、ユーモアに溢れ笑わせてくれるもの。意見の食い違いから衝突する姿を見せるもの。目を閉じて、静かに自分がいる場所を感じながら、遠くの誰かに思いを馳せるものと様々だった。どれも作品としての精度を上げるというよりも（誤解がない様に言う精度は高かった）、国際的なコラボレーションを純粋に楽しんでいるようだった。

Albertの発表は「オンラインが私の故郷なのかも」というタイトルで同じキャンプメンバーであり、同じカババヤン（フィリピン人同胞、同国人、地元仲間の意味）であるSerenaをゲストに迎えて二人で行われた。途中Albertはマカオで学んだという中国舞踊を、そしてSerenaはフィリピンの国歌斉唱の後に唱える「愛国の誓い」を、お互いにレクチャーし合うシーンがとても印象に残った。

まだ収束の時期が見えないコロナ禍の中で、国を跨いだ移動は容易ではないが、今この状況だからこそ、海を超えて向こうにいる誰かこうして繋がれる機会を創出できるのは希望だ。

オンラインだからこそ生まれる熱量や、ライブと違い見せたいものを画面上にどんと見せて強く提示できるのはオンラインの強みでもある。

昨今はSNSで流れてくる情報で簡単に世界に繋がれた気分になれる。でもそれは海岸で宛名のないメッセージの入った瓶を拾う様でもある。知らない遠くの相手を想像することはできても、結局は対岸の火事になりかねない。

今回のCampは相手の顔が見える＝背景が分かるから伝わる空気や温度があることを気付かせてくれた。そしてその空気や温度が心地よい場所が、もしかしたら自分の居場所なのかもしれない。

・コアウィーク

YFFの活動最終週（10月26日～11月1日）のコアウィークは当初予定していた通り東京に赴くことができた。豊岡で滞在制作を終え、休む暇なくそのまま姫路から夜行バスで向かったので体の疲労は最高潮だった。

10月27日の午前中、画面上でしかこの3ヶ月会えなかったYFFのメンバーとようやくオフラインで会うことができ、内心飛び跳ねていた。実際に会った時に分かち合える感動はオンラインと比べ物にならないものだ。

コアウィークは30日のCamp最終公開プレゼンテーションを除き、基本的にExhibitionの小屋入り～本番の見学をした。10月から始まった小屋入り前の稽古の様子は一つも見られず、悔しい思いをしていた。国際協働作品のクリエイションを間近で見る機会中は中々ないため、本番直前から本番にかけての様子を見られただけでも大きな収穫だった。自分の拠点である福岡は「アジアの玄関口」と呼ばれたりもするが、舞台芸術における国際的な交流に関してはめっぽう弱い。

メイン会場のアトリエウエストで見学している間、Exhibitionのクリエイションメンバーの他にスタッフやコミュニケーションデザインチームが常駐していた。YFFメンバー含め常に客席から複数人に見られながらリハーサルしているパフォーマーたちを見て、精神的に疲れていないか少し心配になった。しかし、様々な国の人が同じ空間にいるからこそ、ふとしたことで齟齬が生まれることもあるだろう。先述したガイドラインやレクチャーのことを思い出し、外から俯瞰して目を配る人間がいることの大切さを改めて実感した。豊かで贅沢な創作現場である。と同時に、ここまでの人が大勢同じ空間にいると、作品内容にも少なからず影響を与えている気もした。コミュニケーションデザインチームがいることは素晴らしいことだと思うが、監視されている様にも見えてしまい、実際パフォーマーやディレクションの二人はこの環境をどう思っているのだろうか気になった。小屋入り後のたった数日しか見られてないので、ここだけではあまり判断はできない。やはり水天宮ピットでの稽古が見られなかったことが悔やまれた。

YFFメンバーとは見学以外にも本番やCamp最終公開プレゼンテーションを経てディスカッションする時間も設けられ、これがとても豊かで有意義のある時間だった。同世代のアーティストが考えていることを話し合ったり、また多田ディレクターを含めて話す時間では「東京」というキーワードがたまたま出たので、東京を拠点にするこの意義について皆で話したことも興味深かった。

・反省

10月以降、自身のスケジュールが埋まりすぎたことや、某助成金によって振り回されたことで中々プログラムに参加できず、アウトプットの提出が遅れることも多々あり、これは個人的に大きな反省点である。今回の参加で活動日毎に提出するアウトプット（見学等をした翌日までに提出しなければならない）は、思っていることを言語化するトレーニングになったことは大変だったがありがたい環境でもあった。これまで避けてきていたことでもあったので、これからは活動を続けていく中で作りたいものややりたいことを形にするためにもまだまだ鍛えなければと感じている。この反省は今後の活動で取り返したい。

・これから

母方の祖父は戦時中アメリカ軍に従軍しており、父方の祖父はたまたま広島ではなく山口に出兵したことで原爆を免れた。

これを直接作品に昇華しようとは今考えていないが、いずれ自分のルーツである日本とアメリカのことや経験してきたこと、自分のアイデンティティについて何かしら作品で発表したいと漠然と考えてきた。

今回のYFFに参加して、「いずれ」ではなく「すぐにでも取り掛からなければいけない」と気持ちが切り変わった。これまで自分が作った作品に自身のルーツが何かしら反映されていると思うが、それにフォーカスして向き合ってきたことはまだない。正直怖さも感じている。そんなことをして何になるのだろうとも思う。が、やはり心の奥でチクチクと自分を刺してくる疑問でもあり、ずっと気にしていることでもある。今、自分の居場所を再確認したい気持ちが湧いている。もしかしたら来年のCampか、他のファームのプログラムに参加しているかもしれない（とか言って参加してなかったらすみません）。

自分が所属するカンパニーでは「上演する空間、観客の年齢や国籍に関わらず見たらちょっぴり生きやすくなる作品を発表すべく」活動している。活動当初から目標の一つに挙げていた海外での公演も、いつになるかは分からないが積極的にしていきたい。今回の見聞が活きることを信じている。

背中を押してくれたYFF、プログラムメンバー、制作スタッフの皆さん、そしてこの機会を作ってくれた東京芸術祭ファームにはとても感謝している。福岡にいただけでは見えなかったことが沢山見えた。今回自分以外のメンバーは全員東京在住だったが、今後も東京以外の地方を拠点にしている方にも是非積極的に参加して欲しいと思う。



Photo：富永秀和

五島真澄（ごとう・ますみ）

— 福岡（日本）

1991年生まれ。俳優、パフォーマー。日系アメリカ人の母と広島出身の父の間に生まれる。12歳の時受けたワークショップで演劇とダンスに出会う。2016年に演出家・俳優の高野桂子と演劇的パフォーマンスユニット「PUYEY（ぷいえい）」を結成。PUYEYでは俳優のほか美術と音楽も担当。「上演する空間、観客の年齢や国籍にかかわらず、観たらちょっぴり生きやすくなる演劇的な作品」を目指して活動している。

<https://puyeyinfo.wixsite.com/puyey>